

平成 23 年度 「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」 研究開発領域
第 1 回領域シンポジウム パネルディスカッション 1

高齢者がはつらつと暮らすコミュニティとは
ーコミュニティにアクティブシニアが活躍できる場を創るー

モデレーター：岡本憲之
(領域アドバイザー／日本シンクタンク・アカデミー 理事長)

コメンテーター：秋山弘子
(領域総括／東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授)

木村清一
(領域アドバイザー／東京大学高齢社会総合研究機構 学術支援専門職員)

パネリスト：鈴木隆雄 (国立長寿医療研究センター 研究所長)
辻 哲夫 (東京大学高齢社会総合研究機構 教授)
大方潤一郎 (東京大学大学院工学系研究科)
寺岡伸吾 (奈良女子大学文学部人文社会学科)
原田悦子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

※発言者の敬称略

■ディスカッションの概要

(モデレーター)

パネルディスカッションの副題は、「コミュニティにアクティブシニアが活躍できる場を創る」であるが、各先生方が取り組んでいる研究プロジェクトでは、実際のコミュニティにシニアが活躍できる場を創ろうとしている。まず、研究開発の目的に照らして、どのような場を目指しているのか、そしてそのような場を創造していくにあたって、何がネックになっており、あるいは何が利用できるのか、という点についてお話いただきたい。

(辻)

今はかつての 65 歳の人々の体力が 75 歳の人にあるということで、ミスマッチが起きている。日本は世界に先駆けて超高齢になるので、75 歳くらいまで働くのが当たり前、というくらいに価値観を転換させなければならない。そこで、地域のサービス経済をある程度支える普通の経済システムとして、社会貢献という文化とセットのコミュニティビジネスを普及できないのかというねらいを持っている。プロジェクトでは様々な事業形態・働き方と、そのマッチングシステムを実際に作り、ただ単に働くのではなくて、人と人とのつながりが出来て、地域そのものが変容していく、そういうものを論理化すると同時に、アウトカムについての評価をしっかりとっていく。

(大方)

このプロジェクトのフィールドは大槌町という被災地であるが、実際のねらいは復興のまちづくりを、東北の漁村としての地域の特性に応じて展開するということである。第一の目標は引きこもり・閉じこもりを防止して、自殺ないし虚弱化を防止するところにある。そのためにはコミュニティをちゃんと創らなければならない。しかし、何か地域に貢献できる、広い意味でのコミュニティのビジネス、あるいは住民の共助型の活動というものが基本になれば動かないということも分かってきた。それは、被災地のまちの経済あるいは産業の復興のためにも必要である。

地域でそういう新しいビジネスが生まれると、若い人は本業とか子育て等で忙しいので、ある程度の年齢の方か高齢者しかいない。そういう人たちの活躍に期待する仕事は山ほどあるし、そういう人に期待しない限り被災地の復興は望めないのではないかと、そういうように思っている。

(寺岡)

このプロジェクトは農業・農村の課題に焦点をあてている。高齢者と農業ということ考えた場合に、高齢者というのは村の歴史・技術というものをよく知っておられ、非常に個性的な存在であると思う。こういうものを農業の中に活かしていけるとすれば、それは高齢者が住んでいる村の個性を再び創るといえるか、再構築するということにも繋がっていくのではないかと。よい例として、地域特産品の地域ブランド化というものがあるが、このように高齢者の存在と、我々が目指しているような農業の課題というもの非常に強く繋がっていて、これらの可能性というものを感ずるのではないかと思っている。

(原田)

このプロジェクトは、他のプロジェクトに比べてコミュニティ色があまり強くない。私たちがやろうとしていることは、価値観の逆転といえるか、これまでの工業社会では新しいものを作ろうとした時に、作る人の視点でしか使い方・作り方を考えていなかったが、それを使い手の側からもう一度考え直していこうと。その契機として、高齢社会は私はチャンスだと思っている。

現在悩んでいることとしては、今のところ参加して下さる方は、機械が大好きなスーパーユーザーが多いということである。このプロジェクトとしては、そうではない方々にも来ていただき、色々な人の色々な視点があって、その中での使いやすさというものを、全体として押し上げていくためには何を考えなければならないのかという場を創っていきたい。

(モデレータ)

皆様ありがとうございました。次は鈴木先生にうかがうが、鈴木先生は「新たな高齢者の健康特性に配慮した生活指標の開発」というプロジェクトに取り組んでいるので、活躍の場を創るといよりは、最近の高齢者の特性はどのようなもので、昔に比べて何が変わったのか、あるいは高齢者の活躍の可能性などについてお話ししたい。

(鈴木)

やはり、私たちは高齢者というように一括してしまいがちだと思う。今日のパネルディスカッションは、イメージとして、これが比較的アクティブなシニアが活躍する場としてコミュニティを考えており、次は“生涯安心して自分らしく住み続けられる”という、もう少しアクティブではなくなった時をどうするのかというパートだと思う。このような切り分けも重要である。また男性と女性では老い方も、疾病の特性も違う。また大きな違いとして、前期高齢者と後期高齢者である。前期というのはまさにアクティブで元気なため、高齢者と呼んでいいのかよくわからない。しかし、75歳を過ぎると、心身の機能の減衰がはっきり出てくる。そういう人たちへのソーシャルインクルージョンといえるか、地域の取り組みはどういうように考えていけばいいのか。さらに大きな問題になるのは、認知症があるかないか、あるいは認知機能の低下があるかないか。そういった時に、社会がどうその人を含めて関わっていくのか。このように色々なマトリックスを考えなければならない。それからもう一つは、コミュニティといった場合に、大都市の高齢化と地域の高齢化をとって見ても、それぞれの特性が非常に違う。

このように高齢者やコミュニティといった場合、その内容は非常に多義にわたっているので、

性の役割や特性、前期と後期の高齢者、認知機能、そして地域の特性など、そういったものを認識して、どこをターゲットにして何を話しているのかということを確認するという作業が必要であると思う。

（モデレータ）

ここでは、元気な高齢者ということを中心に考えていきたい。高齢者というと、虚弱で支えられる側といったイメージをもたれやすいが、健康で元気な高齢者は非常に多い。そんなアクティブシニアの方に社会を支える側へ回ってもらうと、今後の高齢社会を持続可能なものにするために大いに貢献できるのではないかと考えている。そういう意味でも、高齢者が活躍できる場を創るということは、今後の高齢社会において非常に重要なテーマになってくる。

これからは、アクティブシニアが活躍できるコミュニティに向けて、どんな課題があるのか、行政と各関係者の役割、それから高齢者の活躍の場づくりを研究開発という立場からどうとらえているのか、というところを自由に発言してもらいたい。

（原田）

私のプロジェクトは現状では有償ボランティアである。将来的には、一種のビジネスモデルのようなものを作り、ある程度自立できる組織にしていきたいという夢を持っている。ただ実際に始めてみて、有償・無償の関係をどうするのか。またお金が絡むことになった時に、組織のあり方も変わってくるし、参加してもらう高齢者の方の意識も変わってくる。そのあたりをどういうように考えればいいのかという点がある。もう一つは、研究者としての立場としては、こうすれば使いやすくなるという、科学の結果として出てきた知見は無償であり、社会全体のものだと信じている。しかし、特定メーカーのプロダクトについて出た結果は経済価値を持っている。そここのところの折り合いの付け方。つまり、現実の経済活動が絡んできた場合には、様々なことを知らないとやっていくのが難しいと非常に強く感じている。

（辻）

高齢者の方は、体力も知力もあるので、ビジネス業界で正当な単価を取れるようなものが成り立つというのが基本的な設計である。そういうものが、ノーマルな地域経済になる社会にする必要があるのではないかと。この図でいうと、普通の労働市場に入る、そういう通常のサービス市場経済の中で位置付けていくというのが1点だと思う。それともう一つが意識である。地域住民として、地域で活躍して、お小遣いをもらい、楽しくやろうという意識変換がとても重要である。

それから産学官民の連携と、行政の役割がある。様々な地域の活動において、行政が参加して入れば大変スムーズに行く。ただし、民間企業の組み合わせを考えると、行政は苦手である。そういう時には大学が入っているとスムーズに行くように感じる。行政がやはりその地域のために、コーディネートの役割を果たしてくことと、柔軟な民の導入が大きなポイントではないか。いずれにせよ、この図の中で、地域の合理的なサービス市場の中に組み込みということが最大のゴールであると考えて取り組んでいる。

（鈴木）

これからのコミュニティにおいては、アクティブな高齢者が満足できるものが供給されなければいけない。私は、日本型の高齢社会の中のアクティブシニアというのは、男性は特に有償労働だと思う。女性は、今までの日本型のスタイルからいうと社交・友人との付き合いだと思う。誤解を恐れずに言えば、男性は就労をどこかで、どんなかたちでもあるということが重要であり、

女性は、そのコミュニティのなかで培ってきた人間関係や社交が自信になるのかなど。そういうものが提供されるような場でなければダメではないかというように思う。

（寺岡）

地域の特産品という文字を見ると、すぐに思い出すのが集落で作っている直売所である。栃原の地域の方々も直売所を作っているが、実際には直売所はない地域の方が多い。つまり栃原は、直売所を作れるだけのアクティブシニアがいる恵まれた地域である。最初のステップとしては直売所のような活動を地域の中でどのように立ち上げていくのか。次のステップでは、そのような活動が経済的な基盤となるための地域社会的な付加価値を、その活動にどのように付随させていくのかということ。そのために、地域の活動をファシリテートしていくコーディネータの存在が重要であると思う。そのコーディネータとして、行政にはよい面悪い面がそれぞれあると思うが、実際にプロジェクトに取り組んでみて、行政が果たすべき役割は大きいと感じている。

（大方）

私のプロジェクトでは、コミュニティビジネス的なものを企画していこうという時のリーダー役、マネジャー役、あるいは資金。それをどうやって育てるのかというのが非常に大きなポイントである。マネジャー役をどうやって育てるのかということが重要だが、被災地ではどうしてもそういう人が一番不足している。その時に、行政の力は大事だが、そちらも人手が足りない。やはり外部の人を入れて、半官半民のようなまちづくり会社のようなものを作り、それを育てていく。そういう戦略があるともっと進むのではないかと感じている。

（モデレータ）

最後にコメンテーターの意見をお願いしたい。

（木村）

この9つのプロジェクトは、大きく分けて2つの役割を持っていると考えている。1つは、高齢者は社会的に見ても大変な能力を持っており、これをいかに育てるという取り組み。そしてもう1つが、新たな高齢者の社会を創設していくという役割。新しい高齢社会のデザインとは、言いかえれば文化である。文化をどう創り出していくのか。高齢者の文化です。これは当然歴史的に見ても非常に評価されていくことだと思っています。またプロジェクトの結果として、1つはその取り組みを通じて信頼関係がどう変わったのか。もう1つは、その活動がどのように広がっていったのか。つまり、様々な地域で実装できるプロジェクトであると思う。まさに人間同士が支え合い助け合う。それが結実するということがまさに文化であると考えている。

（秋山）

個人的な感想となるが、肝心なことは多様性である。地域にどういう資源があって、何が課題か。高齢者・高齢社会の課題は非常に多様であり、また高齢者自身非常に多様である。色々なところに制約があり、その制約から新しいイノベーションが生まれる。そのため、各プロジェクト間で互いに学び合うことが重要である。そしてもう1つは、高齢者自身がセカンドライフへの切り替えが難しいということである。そういう切り替えをどうするのか、新しいイフデザインの作り方、これには、生涯教育ということを本気で考えていかなければならないと思う。

（モデレータ）

皆様ありがとうございました。

（以上）